

# Hermann Kant の „Kormoran“ を巡って

酒 井 府

## (XIV)

Regentraut 婦人はそこで沈黙し、全ての上述の煩わしい事柄を終わらせた  
いかの如く、彼女の黒革の鞆を力強く叩き、主に死に係わり、例外なく嘗て、  
そしてあらゆる点で全力を挙げて生の問題に発言してきた一人の女性の様に厳  
しく前方を眺めた。そこへ戻って来た Kormoran が彼女を此処へ駆り立てた  
のは職業上の事ではないのだろうと尋ね、遠大な計画から現実に戻った彼女は  
多くのより真剣な事と友情と色事のせいだと応え、皆の所在を尋ね、皆は元気  
なのだろうと問う。彼はその問いの意味を理解し、有望な情報への彼の関心に  
就いて語りたかったがその術を知らず、この男は以前より元気だと応ずる。皆  
が彼の命を救った様に聞こえると彼女は言い、彼が判らないが、そう思うと答  
えた時、彼女は立ち上がり、家のドアの方へ向き、Änne を強い声で呼ぶ。そ  
れに反応したのは昼寝から目覚めた隣人の Birchel 婦人で、貴方は手から何  
かを逃したのですかと彼女に言い、彼は今、再び上手く行くと考えている、私  
は緊張していますと庭の境界越しに叫ぶ。

Ruth Regentraut はそれに激しく反応し、ウェランダのドアに更に歩み、前  
よりも強く Änne を呼ぶ。Herbert Henkler と Horst Schluziak がガレージ  
の戸の所へ現れ、Änne は屋内に居ると Henkler が言い、腕を広げて彼女に  
代わって Ruth を彼等の仲間に歓迎すると述べた。Ruth は抱き合うのを避  
け、言葉を挟んだ Schluziak と握手のみをする。庭のベンチに居た Auf-  
derstell 氏も関与し、隣人の婦人にも退屈な様子は見られず、Ilse、Grit、  
Baumanova も庭の茂みからやって来て、まるで彼女等が嘗て別の星で彼女と  
別れて来たかの様な態度を取り、Ilse Henkler が「ついに来たのね、貴方は

全く行方不明だった。死が今や週末の休みを知らない以上、貴方にとって出勤はそれ相応の報酬になるんでしょう?」<sup>60)</sup>と Ruth の高級な装身具と時計を見て資本主義的発想の質問をする。旧東ドイツの住民も統一後程なく資本主義の洗礼を受けた事は此処にも伺える。同様に Grit と Baumanova も彼女の衣装を高級なものを見なし、関心を示す。Baumanova は Ruth の衣装が嘗て自分に合っていたと述べ、二人の衣装の交換を口にし、それを巡って話題が進展し、Schluziak はそこで Barbra Streisand の「私は中古の薔薇」(I'm just a second-hand rose!) を歌って二人の女性を牽制する。Baumanova は先程口にした事を後悔し、Herbert Henkler がその後悔に口を挟み、Schluziak はそれを前者への後者の非難と見なす。一方 Herbert の妻 Ilse は夫が傷つけられた見なし、彼の視線を見ろと言う。そこへ現れた Felix Hassel に Ruth が Kormoran は本当に大丈夫なのかと問い、彼が保証し Grit と隣人の Birchel 婦人が更に言葉を挟む。

Birchel 婦人が Kormoran の事を人生行路にキスをする猥下と呼んだ事をきっかけに、そこに居る人々の間で頭韻転換に始まり、子音交換を経て、たわいない笑いを伴う言葉遊びが起こるが、Kormoran と Änne はまだ姿を見せない。しかし Ruth がローマ教皇(猥下)用のガラス張りの車から思い出したのか Grit の手を経てスウェーデンから手に入れた葬儀用の車 Volvo が門の前に停まっている事を思いだし、Kormoran に誤解され易いと Grit の夫 Horst Schluziak はその車を二、三メートル移動させようとする。Kant による話題の繋ぎの巧みさは此処にも見られる。車のキーを渡した Ruth は彼女の衣装が、嘗て死の天使と言う Kormoran の言を呼んだ事を思い出し、Gerrelind Baumanova の先程の提案に乗り、衣装の交換を告げ、返事を待たずに上着のボタンを外しに掛かり、Horst が車の為にその場を去る事を促し、Henkler と Aufderstell をもその場を去らせようとするが、Horst は躊躇し、他の二人は去ろうとせず、Henkler は躊躇しながら去る Horst をむしろ促し、起こった事は全て知らせるよと言う。エロスを期待する男の身勝手な心情を描写し、苦笑せざるを得ない。

しかし Ruth は Henkler に嘗ての国家防衛評議会中佐としての情報係の役割は終わっていると牽制し、別の旧国家幹部 Horst に付いて Volvo の所へ行くように言い、四人の女性達は男達はその場を去る事に同意し、結局三人の男は女達の論理に勝てず、その場を去らざるを得ない。この辺の両者の攻防も興味深い。そこで庭の遠くで Kormoran の草案を読んでいる医師の Hassel の事は気に掛けず、女性達は Kormoran をショックから護る為に衣装の交換を始める。衣装の交換を口にしたものの、それを促されると嘗ての女性記録映画家 Baumanova はいろいろと口実を挙げて躊躇するが言葉のやりとりの後、結局ヤッケのみならずブラウスも肌着も Ruth の要請に応じて与え、彼女は Ruth の黒い衣装を身に付ける事になり、Ruth がラディカルになったと述べる。Ruth は敢えて否定せず、死者達との関わり of the せいかわかれ、Baumanova と共にストリップショーを演じながら、「死者達は此の玉虫色の時代には非常に平和的に協調し」、「彼等は少なくとも変わらないし、何によってももはや殺される事はない。」<sup>61)</sup> と答える。そこから彼女はオランダ人とハーフで、その朝、放心状態で亡くなった Friedhelm Küttner に話を転ずる。彼は Thüringen 生まれで、彼の村に東西ドイツの国境が走った後、西側に逃げ、どの窓にも体制批判の松明の灯りをと云うキャンペーンで蠟燭を売りとなったので、その朝の葬儀での家族の集会には嘗て二つに分けられた同じ村から、つまり、一方は Thüringen 州より他方は Hessen 州より、更に Mecklenburg その他、またオランダからも集まる事となり、葬儀はベルリンで行われたと云う。話題は更に、国境が出来てから Küttner の母親と彼女の従姉妹がもはや息子に電話を掛けられない状態が息子の青年時代続き、彼女は憂鬱症に脅かされた事に至る。その上 Ruth は彼の葬儀が管轄牧師と見られた例の Gauck 主宰のもとでなく、他の牧師主宰のもとで行われた事にも触れる。ある日突然境界によって一つの村が異なる体制下の二つの村に分けられた結果起こった事態を語っているが、それに続く Grit の話しは統一前の東西ドイツの状況を更に如実に語っている。

Küttner の仕事は何年も順調に行ったが、その後、最も厳しいもめ事が起

こった。つまり彼は両独間の職業上の関係を利用して、国家間の通話が駄目になった時、母と従姉妹の為に私的な電話回線を敷設しようとした。Ilse は驚き、それが国境警備隊の重苦しい明け暮れに若干の明るさをもたらしたと受け取る。結果は勿論拒否であったと Grit は主張する。話しはそこから当時の東西間交易の停滞へ進展し、東ドイツ企業に於ける資材、動力燃料、労働力、供給、宿泊施設の不足が計画を駄目にし、最終的に最高機関で決断が為される迄その状況が何ヶ月も続いた事が語られる。Küttner の死を信じられない Ilse の言に Ruth が答え、Birchel 婦人も言葉を挟み、Ruth は本で読んだ百五十年前の葬儀料の話しを始めるが Grit も彼の死を信じられず、最後に彼に会った時、彼が電話を巡る闘いで資本主義と社会主義間の相違を体験したが、理解しなかった事が彼をぼろぼろにしていたと述べる。隣の Birchel 婦人がコードレス電話の事を口にしたが、Ruth はコードレスは考慮されず、電話回線では東に絶えず損失が起こる事等の理由を挙げてそれが不可能だった事を言い、中断していた Baumanova との衣装の交換を継続する。Grit はしかし、どの企画でも東に損失、西に利益と云う事態は判るし、それが神経を苛立たせるが、彼をぼろぼろにし、死なせるとは理解出来ないと述べ、Birchel 婦人も同意する。Ruth はそれに、苦労が彼を死なせたのではないと答えたが、彼が家族での祝い事で朝食を取っていた時、彼の村が再統一で再びケーブルが敷設されたが、地上の回線が廃止され母と従姉妹が無線電話に鞍替えした事を電話で聞き、受話器を置いた話しをする。此処にも東西ドイツ統一時のドイツ人の複雑な心情が見られる。Gerrelind Baumanova は衣装替えの最後の段階で靴を替えながら、彼女の職業意識で、彼が西側への移住してから味わった出発と挫折と云う経過、精神的打撃から回復へ、再び精神的打撃へと云うその場にカメラを持って居合わせたならばと語る。

Birchel 婦人、Grit、Ilse がそれぞれその言葉に反応している所へ家の中から Anne が現れ、Ruth に「ついに来たのね」と言い、「皆は何をしていたのか」と尋ね、Ruth は Kormoran の状態を聞く。Anne は二人の衣装替えに気付き、その理由を Birchel 婦人が説明し、二人の会話は例のポーランド製

人工心臓弁を巡って続く。Änne が衣装替えした二人を見たら、Kormoran の心はその人工的な部分迄暖められると述べた事から、再会は喜びその物だと言う Ilse、Grit の話しになり、Birchel 婦人が話しに加わろうとした時、Aufderstell 氏が息を切らしてやって来て Ruth のスウェーデン製の葬儀車が動かないと訴える。そこから車がヴァイキングに占拠されているとか、七人のこびとが会議を開いているとか彼と Ilse の間に冗談が交わされるが、Ruth は彼に例の人生救助財団 WEDUDALE の行方に就いて計画を立てたのかと問いながら、助けに行くと言う。Ilse は Änne に Paul-Martin Kormoran の目に葬儀車を触れさせない為だと事情を説明するが Änne は彼がとっくにその車を見て、すぐ現れる事、オハイオ製の人工弁回収旅行が始まったとお粗末なウィットを言ったと語る。Kant の話題転換の巧みさとユーモアは健在である。

しかし Baumanova は彼女の黒い衣装が黒い車に相応しいと思い、Ruth に留まる様に言い、モロッコで兵団を撮影した時、多くの車を押して動かしたと述べ、Ilse のどれ程の兵団かと言う問いに、数を言うから通りに来る様に話す。Grit も行くと言い、階段を下りながら Aufderstell にそこに留まり、元気を回復する様に述べる。

### (XV)

彼は指示に従い椅子に座り、Ruth に何か活発な考えを述べたげであったが、Änne の存在に妨げられる。Kormoran がヴェランダのドアの所に現れ、居なくなった客達の事を聞こうとしたが断念した。おそらくそこに残った者達を適切な情報提供者と見なさなかったし、対話の相手をすぐに妻に限定する事を不作法と思ったからである。精神的な軌道へ再び入り込む相手として、庭で原稿を読むのに没頭している医師の Felix Hassel が適切だと判断し、原稿の内容を敢えて聞こうとせず、彼は Hassel に感謝し、彼がたった今読んだダーウィンに関する馬鹿話が本当に素晴らしい娯楽書であったと呼び掛ける。それは新しい内容ではなかったがとコメントをしたのに対し、Hassel は Kormoran に

とって箱船に当たる、彼が今読んでいる物は全て彼にとって全く新しい物だと答え、もうじき読み終わるので、君が望むならば語り合おうと言う。Kormoran は話題を転換し、何故、電話が全く鳴らないのかと皆に問いかけ、Hassel と若干その件で会話を交わし、Birchel 婦人が乱暴に言葉を挟んだ事に些か腹を立てて言葉を返し、椅子に座り Änne に向かい、衣装替えした事に気付かず Ruth が来ているのかと尋ねる。衣装替えした事を告げる機会を逸していた彼女は名を挙げられた時、次の機会と立ち上がったが、此処でも Birchel 婦人が口を挟み Ruth が既に居る事を告げる。Kormoran はそれに応えず、我慢強く待っていた Aufderstell に親しげに話しかけ、改めてポーランド製人工弁の助けで自作朗読会がスムーズに行きそうな事、彼の知らせで展望が二十八パーセント広がった事を感謝し、その上でよそよそしい衣装を着た Ruth に彼女が自分の装備で現れなかった事を残念だと述べる。

その事にまたもや Birchel 婦人がコメントをし、彼が朗読する事に関心を示すが、彼は皆が集まってからだと言明し、それぞれの名を挙げ、相変わらず Ruth の衣装に拘る。そこに居る人々が行動を開始した時、なお相変わらず気を悪くしていた彼は Birchel 婦人を気に掛け、彼女のせいかと尋ね、彼女は否定し、彼の為であり、Ruth の為であると言うが、彼からは Baumanova 婦人の為かと誤解される。しかし、彼女に誰の為でもないし、外見よりその場に居る事だと言われ、状況の不一致を察して、彼は話題を前からの話題、彼の心臓に転換する。彼は此処でその場に居ないのに、Gerrelind (Baumanova) に、彼女が性能の良いマイクロフォンを持って来なかったのは残念だと言ひ、彼が持たずに来るように頼んだとは云え、後悔していると述べる。Aufderstell 氏の良い知らせ以来、心臓の音が同じようになつたか知りたいからである。夫の此の姿勢に対し女医 Änne Kormoran は彼の頭がおかしいと云う仕草をし、人工弁からは脈拍不整の音しか聞こえないと言ひ、ポーランド製の弁に託けて歌の文句「まだ望みはある。」(Noch ist Polen nicht verloren)<sup>62)</sup>と脈打つと期待しているのかと揶揄する。Kant のウィット、ユーモアは此処でも発揮されているが、それに続く場面も興味深い。動かぬ霊柩車に取り組んでいる歌の

好きな旧副大臣 Schluziak がその場に居て、そう歌ったら誰も驚かなかっただろうが、真珠のようなベルカント歌唱法とずれた歯擦音でその歌をポーランド語で歌い出したのは Birchel 婦人であったと Kant は語るからである。

Änne が精神的な状況が心臓音に現れるものか関心があると述べたのに対し、Kormoran は人工心臓弁がオハイオの河畔のみでなく、ポーランドの Lodka 河畔の製品でもある事を知って以来、彼の言葉と声がスムーズになったと言い、ブロックハウスに載っている Lodka 河畔の Łódź に就いて言及し、誰がその記事を書いたのか知りたいと言い、それぞれが耳を傾ける。Änne は彼が他人の事を彼の話の対象にしている限りは納得したが、彼が心臓の辺りを叩いて、多国籍製心臓弁と彼との共存と云う、自己の事を話題の対象にするや彼女の夫への納得と友情は遠のいたのである。彼女は彼が関心を抱いているブロックハウスの事項に就いてどれ程解釈を下すか興味を抱いていたが、それが殆どなかったもので、彼が障害者である事は誰も知っているが、彼がそれにおぼれ、他の事や他人に対する視線を失っている事に気付いているか問い質す。彼はそれを否定し反論するが、彼女は彼がブロックハウスで紹介した Łódź に住むドイツ、ポーランド、ユダヤ三民族間の精神生活に就いて幾らか述べる時間はあったと言い、Birchel 婦人の言葉も遮る。彼はそれに対し彼が語ると語りすぎと言われ、黙ると黙りすぎと言われると述べる。しかし彼女は、彼が自分の事と自分の身体的欠陥に話しを向けなかった時は、聞いたり見たりする能力を失い、他人に対し聞く耳も見ると失ったと強調し、彼がそれに気付いていないと例を挙げて批判する。彼はしかしその様な兆候を読み取れず、聴衆のみと彼が他人に就いて語り得るチャンスのみを見て、まるで所見の様に、Ruth の事は誰も心配しなくてもよい、彼女は苦勞して埋葬業に携わっているからと述べる。Änne は此処で彼の話しを遮ろうとするが、Ruth も彼の言葉に反応する準備をしていなかったため、彼は Änne が警告的に挙げた手を無視して、「いいや、今は専ら他人に就いてで一言も私に就いて話していない、今は私に話させてくれ！」<sup>63)</sup> と言い、Ruth も Gerrelind も時代の転換を経た地上で後悔は価値が無い事、まして仕返しやあくどい稼ぎは価値が無い事を知っていると述べ、彼

女の職業分野では、死が早く人間に歩み寄り、最も早い歩みで人間を地下に連れて行くのが意味があると語り、資本主義下では企業間の競争が避けられない事に話しを繋げるが、Ruth が彼女に関する話しを止める。彼女は自分の事に就いて全て聞きたい気持はあるが、それを恐れる気持もあるからだ。彼は口を噤み、私は見なかった物を見ていると呟く。

此処で隣人の Birchel 婦人は勝利した様に頷き、彼女の言った事を聞いてくれなかったが、彼女がその事を度々暗示したと言い、身を乗り出すが、駕籠(車)を移動させに行った人々が戻って来た事、更にあの郵便配達人 Blauspanner も来た事を告げる。Änne が Felix Hassel に彼の電報が読み上げられるので来ないかと呼び掛けるが、Kormoran は書類を読んでいる彼に来なくてよいと言い、戻ってくる人々に愛想よく手を振り、一流の舞台上の一流の人物の如き印象を与え、棺台(車)を押してきた彼等に、更にとりわけ郵便配達人に歓迎の意を示し、何か新しい事があるのかと尋ねる。Änne は彼が最初に来た時、夫に来た電報を持ち帰ってしまったので、愚行が彼を再び来させたと考え、食器とコーヒーの補充の事に気を回し、後ろの方の椅子に腰を下ろす。戻ってきた皆はテラスの中央に集まり、疲労し息を切らしている。郵便配達人は馬鹿げた行為の繰り返しを避ける様に手に一杯の書類を直ちに手渡し、一杯ワインを飲んでから新しい電報はないと Kormoran に答え、出版社からのお祝いと市場経済上の一通の文書だけで、実用的な人々だとコメントをし、それを読んだ Kormoran も同意する。Blauspanner が此処で六十六歳の誕生日を迎えている Kormoran に六十七歳にやがてなりますねと問いかけ、彼はやがて、と答えざるを得ない。そこへ Felix 教授が階段を上ってテラスへやって来て Blauspanner の両手の中の電報を彼の書類で指し示し、その事を話し合おうと言う。それに対し、Kormoran は例の「箱船—草稿」に就いて Felix の異論を聞きたいが、またベルの背後に隠す迄、待っても良いと言うが、後者はその事を話し合わざるを得ないだろうと答える。彼のその要請はどちらかと言うと、Aufderstell に向けられたものであるが、相手が頷く前に彼は話しを勧め、彼の第一の異論は消費と関わって来ると述べ、あらゆる成功したシステムの分析

と純粋な習慣の究明から始めると語り、モード製作者と消費の例等を挙げ、消費の分析の必要性を説く。そして彼が恐れるのは此の仰々しいやり方で我々が死に際して何故死が正に此の時点に来なければならなかったのかを知るが、どの様にそれが避けられたのか残念ながら知らない事だと言う。Kormoran の心臓を手術した医師 Felix Hassel が言いたいのは、死までモードと消費と云う関係に巻き込まれている現実であろう。

Kormoran は医師を彼の近くの椅子に引き寄せ、例の草稿、同様に「バイオノミックス」と云う本も、更に書き込まれたタイプ用紙集を郵便物の上に重ね、此の代物が対話又は思考の素材になると言い、手紙、草稿、娯楽書、想い出で、古い惨めな煽動書だが面白いと述べ、それら全ては Aufderstell 氏が或る考えを述べようとしているので、今は発表を待たねばならないと語る。彼は偉大なダーウィンを例に出すのを許して欲しいと言い、「種の起源」が二十一年間、印刷に付せられなかった事実を挙げる。医療器部門の長は立ち上がり、そこの集まりが聞き耳を立てる会衆になるのを待つ。Hassel も Kormoran も含めてそれぞれの姿勢を確かめてから彼は「ダーウィン！ 自然淘汰による種の起源に就いて！ 一方では」と小声で話し始め、声を高めテンポを挙げるが、旧副大臣 Horst Schluziak が「それは Lyssenko ではなかったか？」<sup>64)</sup> 発言して中断される。Änne はそれを否定し、正にその様な取り違えによって私達には何ら良い事は生じなかったと語る。スターリン時代の教条主義に対する彼等の批判反省である。Aufderstell も同意し、言葉の調子は落とさず、「一方では、全世界は元気を失わせる関係にある。二本の引き裂かれた電話線で」エポックその物で、エポックの変化が続いていると語り、「テーゼ：あらゆる人間が作った、人間が利用した産物は人間関係の倉庫である。生産物だけでなく、風俗習慣も、とりわけ倫理も。手短に言えば、体験の貯蔵庫である。あらゆる対象の中には、これが私の考えだが、出来事が閉じ込められている。特記すべき、ドラマチックである事が希ではない出来事が。」<sup>65)</sup> と述べる。当然、ありきたりの唯物論的思考に基づいているが、統一直後の旧東独知識人の感慨も見られて興味深い。

Grit Schluziak が「対象化された労働」とうんざりして応じたのに対し、彼は彼の思考のその様な狭隘化には充分用意していたので、「決してそうではなく、むしろその様な関係の中で対象化された運命に就いて話す用意がある。」と応答したので、Birchel 婦人は早速、「どの弁も生の貯蔵庫であると言うのは何の為に良いことなのか？」と、Kormoran の心臓に話しを結びつけ否定的に叫ぶ。医療器部門の長はそう言う目的設定からは出発はしないと答え、彼女を更に相手にはせず、テラスの仲間に向かって、彼等は皆、懐疑的に彼を見ているが、職業柄それには備えていると言い、彼は事物と対象の静かな力を知っており、それを信頼しているのでそれぞれが彼等の任意の物を机に出すようにと願う。それに応じて各人はポケットの物やその場に在る物を机上に、隣人も境界越しに新聞を出す。彼は机に出されたバイオノミックスと云う本、例の箱船の紙片を、それらは既にメッセージであるので他の対象物から分け、秘められた告知、カプセルに容れられた歴史が求められていると言い、彼は皆に長く彼に付きまとっている或る考えを挙げたい、つまり、我々が我々を取り囲んでいる対象の中に存在する物が刻印している事を読み取る事が出来るとしたら、我々の状態ははどう違っているのだろうか、世界はどの様な状況にあるのだろうか？と哲学的問題を投げかける。Hassel と Kormoran はまたもや固定観念に出会したとお互いに視線を交わし、敢えて何も言わないが、Anne Kormoran は彼の思い上がりに対し異議を示した。彼女は頭を振って暗示し、私達がこれらの対象の中に読み取る事が出来るとしたら、私達はどの様な状態になるのか？ 少しも良くはならない、私達が読み取る事が出来るもの、聖書やアイヒマンやアンネ・フランク等が助けになったか？ 決してそうならない、読む事を次から次と重ねても助けにならないだろうと悲観的な見解を述べる。彼女の妹 Ilse は最も唯物論主義的な女医の言う事は聞くなと彼に言い、むしろ何処から彼が見事なイデーを得たのか言って欲しいと述べる。彼は考える事がホビーだと答え、話すのを止めず、病床の或る呼び出しベルがその着想を呼んだと言い、それは取るに足らない小道具だが、どれ程の不安、希望、愛と生がそこに詰め込まれている事か！と語る。更に事物の中に閉じ込められている

情報が閉じ込められているエネルギーに比肩し、その解放を待ちこがれる時はどうなのか？ そのエネルギーが、それらの対象に就いての観念が彼の中から出ざるを得なかった様に、それらの対象から出ざるを得ない時はどうなのか？ と言い、彼等を痕跡捜しに駆り立てる彼の考えはそこまでだと述べ、意見を述べられた事を皆に感謝し、称賛や批判的意見を期待する事なく、深く満足してただ自己を見つめたのである。

### (XVI)

目下、商業に従事している Grit Schluziak は上述の意見を取り入れ、Aufderstell より葬儀車のキーを受け取り、そのキーに秘められた情報の一番下に何があるか知っていると述べ、スウェーデン人達が六十台の装甲したりムジン販売の謝礼に赤十字用救急車一台と黒塗りのライトバン一台(葬儀車)を付け加えたと語る。Ilse Henkler がそれはスウェーデン政府に要請した賭けだったのかと尋ねたのに対し、Grit は賭けに勝ったのだと言い、旧東独政権が事実そう受け取ったので、彼女等はその霊柩車を手に入れ、人民所有企業 INTERMORS の中核にし、Ruth のキャリアの基礎にしたと、救済者としての若干の誇りと自分が背負った悩みと努力に或る程度浸って、幾らか自己満足して答える。それに対し、Ruth はそう言う事がこれらのキーに隠されているのかと問い、彼等の下で彼女の楽しくはないキャリアを開始した事をどれ程喜ばなければならぬのかと述べ、彼女が押し殺してきた呪いを掘り起こすのを楽しんで下さいと皮肉を言い、その上 Kormoran には前もって墓碑銘に心から感謝すると語る。Kormoran は彼女の非難を聞かないふりをして、彼女宛の電報に熱中したが、過度の親しげな愚鈍さは顔に表れ、放心状態で手を挙げ、Ruth の辛辣な感謝の念を心ここにない喜んでと言う言葉で受け入れてしまう。

一方彼は紙で仰いで、此の出版者は素敵な奴で、彼の回顧録を彼の死後出した方が良くと先日冗談の中で話し合ったが、今や此の見解を全く真剣に強めていると述べる。それで？と企業家の Grit は問いかけたが、先ず企業家の Ruth に専門家としての意見を問わざるを得なかった。答えは無かったが、多くの者

達からは問題の回顧録を出来る限りすぐに出版するよう激励と要請があり、Birchel 婦人も生きている内に出すように口を挟む。Herbert は同意見だが、彼の妻で Änne の妹 Ilse は死後の方が印税が高く、Änne に葬儀の負担を軽くすると主張し、Baumanova はそれによって NNBB 葬儀社の Ruth もいくらか利益を得るだろうと言う。その話を聞いていた Felix Hassel はどちらの場合にも Kormoran はその草案を仕上げる前にこっそり逃げてはならないと述べ、出版がどれ程、彼の遺作を力づけるか考えて欲しいと言い、友人達や出版者等が抱いた出来の良い関心が彼の生の記録へ取り入れられた時、Regentraut 婦人 (Ruth) による利用に任せたら良いと語る。旧副大臣 Horst Schluziak は彼と Kormoran 二人が回顧録を書く時には彼の例の日記を、後に両者の間に齟齬を来さぬ様に Kormoran の回顧録と是非比較して欲しいと主張する。Herbert はその思慮に同意するが、その為には Horst は逆の意味にも取られるその日記の略語に関するリストを提供すべきだと語り、後者は良いアイデアだと認め、Kormoran がその回顧録をどう纏めているか知りたいので、いま読むべきだと提案をする。誰もがそれを知りたがっているように見えたので、Kormoran は立ち上がり、草案を取りに、台所に居る Änne を呼ぶ為に立ち上がり、屋内に消える。彼が戻る迄、各自の行動が描写され、Änne は彼と共に戻り、二人は皆の傍に席を占め、彼女は夫婦の一方が聴衆の前で披露する時しがちな寛大さをほんの少し見せ、彼に皆が集まり緊張して待っている事を知らせる。

彼はほんの少し躊躇してから、草稿を手にし、それに目をやり、回顧録の最初の言葉がどうなのか誰かが予感しているかどうかと言う問いは断念すると語り、誰かがその言葉を知っていたと主張しようと思うなら、後になってそうしても良いと言う。彼は今一度、皆が本当に聞きたいのかを確認して、あれは多分オカリーナと云うのだと気まぐれに述べ、1992年6月14日の午後の早い時間に、スターリンとオカリーナに係わる彼の自叙伝的な物語の最初を読み始めた。

スターリンが彼を呼び出したと、彼は読み始め、スターリンと知己の間柄で

は無かったが、我が儘だと聞いていたので断れなかったと述べる。スターリンはパイプに煙草を詰めながら、同志よ、と彼が一度も呼ばれた事もない呼び方をして一服吸ってから、その後有名になった問い「法王は何個師団持っているのか?」を彼に向けたのである。スターリンは法王の権力に嫉妬したのだと考えた彼は自分が回答を与えるのに相応しいとは思えず、おかしくなるのでは無いかと恐怖を感じたのである。彼はワルシャワ捕虜収容所からクレムリンへ呼び出されたのであり、その様な出会いには慣れておらず、彼はスターリンの為に呼び出されたとは思いつかなかったが、同志よ腰を掛け、紅茶を飲み、答える様にと云われ、スイスの護衛部隊は持っているが、師団に就いては知らないと答えたのである。それに対しスターリンは彼の充分な情報によれば、法王は一大隊の強さは手中にしているが連隊はもはや、まして一師団、いや数師団は意のままに出来ないのに、法王は或る面では彼より強い権力を持っていると述べる。Kormoran は法王が権力を持っている事を信じようとしたが、彼が信じていた事を問う為にスターリンが彼を収容所からクレムリンへ移送させたのではないと思う。しばらく煙草を吸ってからスターリンは、自分の影響力を否定はしないが、法王の国は半平方キロメートルもなく、自分の国は地上の六分の一であると語り、面積と云う要素は重要な要素でないし、人口なのか?と問い、Kormoran が笑うと、ユーモアは自分等の対象ではないと述べ、法王の権力は何に基づくのかと更に問い、法王が切手を発行するとあらゆる国の切手収集家への彼の影響力を証明し、幾つかの国の共産主義者へも影響を与えていると語る。スターリンはなお、自分等が世界中の献金袋を足しても、彼の収集額には及ばないと述べ、回答は物質的下部構造にあるのではなく、上部構造にあるのだと語る。続けて彼は「下部構造と上部構造。法王は何個師団持っているのか? あのヒットラーは来て去るがドイツ人民は、ドイツ国家は残る。そして正しい路線が与えられていれば、幹部が全てを決定する。」<sup>66)</sup> とその後幾度か聞かれる言葉を吐いたのである。

非常に興味深い箇所であるが、Kormoran に重なる Kant 自身が同じワルシャワ捕虜収容所からスターリンに呼び出されたのかどうか目下の所私は確か

めてはいない。

Kormoran は彼が遠くから呼び出された意味を何となく予感したが、此の様な対話への彼の適性能力を信じてはいなかったし、正しい路線或いは決定する幹部達の事には熟知していなかった。彼は幹部とは部隊全体に命令を下す軍人だと思っており、スターリンが彼の知識を試し、クレムリンの広い庭で挺身隊を演じるように命じない事を望んだ。しかしスターリンは幹部に就いての考えを述べ、この事に就いては論議しないと言い、彼もその様な事は考えていず、彼は法王の件では助力出来なかったと自認する。スターリンはパイプを置き、窓際へ行き、彼の方に向き直り、また、ヒトラーは来て去るがドイツ人民は、ドイツ国家は残ると繰り返す。その様に一般的にドイツ国家に就いて話すのは問題だと言う党派制は Kormoran には欠けていたし、歴史的理解力も乏しかったが、彼は一人の幹部としてスターリンに雇われた可能性もあり得ると云う疑いが改めて彼に起こった。ところがスターリンはパイプを両目の前に掲げ、腕を伸ばして掛け時計の所へ行き、夜中十二時直前の長針と短針の間に挟み、真夜中になるのを、つまり時間を止め、Kormoran の息を止めたのである。彼はどんな道具が人間と権力の間をより良く調停するのか云うのは難しいが、時計の歩みを妨げるのよりも愚かに思えた事は殆ど確認出来ないと考えた。スターリンはそこで、「法王の幹部達の誰一人、彼等の神とその養子を見なかった。しかしその路線から何が生ずるかは彼等次第であるかの様にその路線を彼等は実施する。」と言い、法王は武力の師団を持ってはいないが、そのイデーに忠実な男達を抱えていると羨み、Kormoran が似た様なねばり強さと成果の豊かさを持っていると述べ、続けて「私は武器をもはや信じない理由を持っている。私は大衆をもはや信じない理由を持っている。私は再び歴史に於ける個人の役割を、個性の意義を想起し、そしてそれを師団に代わって個々の人間達で試みる多くの理由を持っている。貴方がその一人で在る様な名のある人物で、同志よ。」<sup>67)</sup>と Kormoran に呼び掛けた。ワルシャワ捕虜収容所のドイツ捕虜指導者であった彼を、イデーを持った器として評価し、状況を検証し、結論を引き出してくれと要請する。スターリンは、後に彼の師団数を嘲笑的に問題

にする輩に対して既に今日微笑み返したいと望み、Kormoran に紅茶を改めて勧める。スターリンは敢えて回答は求めず、グラスを口に立ち上がった彼に座る様に手で命じ、時計の針の間に挟んだパイプを外したので、長針は大きく進み十二時八分となった。スターリンも現実には止められなかったのであり、彼は Kormoran に更に留まる様に要請し、パイプと似た大きさの道具オカリーナを取り出し、試しに一吹きしてから柔和な低い音を響かしたのである。彼が去ろうとした時、彼の目は救いのない視線を投げ、彼は挨拶を返す為立ち上がった Kormoran の方を再び振り返らず、好きな信頼するメロディーを奏でドアから去った。別のドアが開かれ、Kormoran を連れてきた男が勧めたので、彼は紅茶を飲み干した。「全く判らないものだ、その男は言った。従ってその男は今日まで間違っていない。」<sup>68)</sup> という言葉で Kormoran は自叙伝的な物語を切る。

### (XVII)

スターリンに関わる非常に興味深いエピソードであり、スターリンの人物像を如実に現していると云えるが、Kant の半生記である自叙伝<sup>69)</sup>を読む限り、彼のワルシャワ捕虜時代にスターリンに会ったと云う事実は見当たらない。従って Kant の創作と云えようが、スターリン批判以来四十年近く経ているが故に描かれるスターリン像でも在ろう。

Kormoran の仲間達と客達は彼の物語に耳を傾けたが、隣人の Birchel 婦人はスターリンと云う恐ろしい名が出た最初の文章を聞いたや否や、電気椅子に打たれた様にその籐椅子の中で体を強ばらせ、その自縛状態を続け、やがてひどい不格好な姿に崩れ落ち、仮死状態になったが、再び元の充実感を取り戻し、椅子から立ち上がり、爪先歩きで彼女の家に入ろうする。しかし彼女は中断し向きを変え、元の場所まで戻り郵便配達人にエネルギーシユに合図を送り、改めて籐椅子諸共、家に引っ込み、郵便配達人 Blauspanner は語り手に遺憾の意を示しながら、彼女に従った。その様なわけで、聴衆へと敢えて要請されなかった Aufderstell 氏を除き、皆は Kormoran が彼の報告の最初を終わっ

た時、良き友人達がそうする様に黙っていた。しばらくして Baumanova が同じ芸術家として言葉を述べようとしたが、そうならなかった。郵便配達人が改めて現れ、テラスのテーブルの所に迄来て、厳かに、報告の途中で席を外した事を Kormoran に詫び、「テーマはでも私の頭上を通りすぎたのです。」<sup>70)</sup>と述べたからである。それに対し Kormoran は電報に就いて感謝する為に付いて行きたかったぐらいだと語り、国際的な俳優等の物より、新しい世界に触れた出版者の電報の方が貴重だった事を述べる。一方 Blauspanner は最近の時局の中で政治的なものを理解しようとはせず、郵政の方を優先し、次の六で終わる年齢、つまり Kormoran の十年後七十六歳の誕生日の電報に就いて述べ、彼を喜ばせる。Kormoran は彼にワイン一本を贈り、彼の家なり、Birchel 婦人の所で杯を上げる様に勧め、歓喜の言葉を発する。郵便配達人はそのラベルで良質のワインを確認し、彼女の所へ戻ろうとするが、Henkler が待ったを掛ける。Herbert Henkler は Blauspanner がテーブルに忘れていった七十六年製造の二マルク貨幣から七十六歳の誕生日と云う後者の気儘な論拠を知ったのであり、Aufderstell の人工心臓弁原理の本質に捉らわれているが由に七十六年と云う年号を忌々しい年だと取えて非難する。Brüsewitz, Havemann の事件があり、有名な歌手の罵りが先ずあり<sup>71)</sup>、その時より自分達は完全に死んだと云い、忌々しいテレビの通信員達と仏教の焼身自殺派の事等も挙げ、二マルク貨幣をその持ち主に投げ返し、「あの時ならば、こいつは貴方のズボンのポケットに焼けこげ穴を付けたらろう」と言う。Blauspanner はそれを難なく受け取り、「今日は心地よい温かさだけが発している。」<sup>72)</sup>と洒落た答え方をして何人かの女性達の拍手喝采を背に Birchel 婦人の家に戻る。東西ドイツ分裂時の七十六年と統一直後の時期それぞれへの旧東独住民の思惑を語って興味深い台詞である。

Baumanova も拍手喝采に加わろうとしたが、黒い衣装を着ている場での拍手を考え、拍手も言葉も控えた。しかし記録映画作家としてその事態を考え、秩序を確立しようとしてその場に相応しい話し手を訴えるような目で探したが、大方はその性格上、または何事かに熱中していて今は相応しくないように彼女

には思え、結局、二年前の今日手術によって Kormoran の経歴に貢献した Hassel 教授が残った。しかし彼は彼女の目の訴えを見て取り、始まりと同様に陽気な話しが続くのか?と Kormoran に尋ねた。Kormoran がそのような評価に異議を唱えようとした時、Grit がスターリンは良いけれど、夫 Horst は気分が良くないと言い彼も頷いたので、Hassel は病人を診ると言い、二人を家の中に招き、スターリン時代の事を聞きに戻って来ると肩越しに叫んだ。その後 Aufderstell は Kormoran の考えを評価し、それを文学的にまとめる事を勧め、人工心臓弁に係わる炭素やチタンに就いても触れようとし、溜め息をつき Änne の同意を得ようとするが、答えを貰えず、更に話しを続けるが、Hassel がテラスのドアの所へ現れ言葉を遮り、Horst Schluziak を車で彼等のクリニックへ即座に連れて行き、手続きを取る様に彼に頼み中へ戻り、車で来ていないと言う彼のどうしようもない訴えにはもはや応えなかった。その理由を彼は Kormoran の要請だと述べ、後者は酒気帯び運転を避ける為だと認め、Ruth Regentraut の黒い霊柩車ボルボしかない事に触れる。緊急を要する事なので数キロ先の祭典に来ていると思われる救急医と近くの病院の事も Änne により話題になるが、Hassel の意向を優先するよう彼女は確かめに行く。その間 Horst の状態、彼とその妻 Grit、Ruth、Aufderstell 四人分の席が車にあるのかが、更に棺が積んであるやむを得ない事情が話題の対象となり、それに続いて Aufderstell は Kormoran にその日の昼の時間が最近にない最も幸せな時間であったと礼を言い、Ruth は羽の付いた様な Baumanova の衣装で運転するのは不可能だと述べ、その衣装を脱ぎ後者の着ている彼女本来の黒い衣装との交換を申し出る。人々は出発しようとし、別れを告げようとし、別れざるを得ず、そこに残る人々に余計な言葉は言わなかった。

一方 Baumanova は急いで衣装を替え、やむを得ぬ理由で Ruth に同伴すると Kormoran に強調し、涙を流して彼にキスをし、改悛や芸術やモードや死等様々なテーマに就いて話したいので又来ると述べる。更に彼女は今考えているプロジェクト、作家 Bobrowski の「死の歌」(Sterbelied) の映画化等に就いても語り、その場を去る途中、小柄な Aufderstell を引き連れて行く。

テラス越しに連れて行かれる彼は Herbert Henkler の彼を町へ連れて行く車は正に理想的なイデーの貯蔵庫であるのだろう。——全てのどの様な人々がすでにその車に長々と眠っていたか考えると。と言う皮肉とも取れる言葉を親しげに心に留め、Herbert に合図を送り、庭へは彼が彼女を導いたのである。

話題が出発の事に及んだ時、Ilse Henkler も落ち着かない様子を示し、上記の二人がその場を去った時、長くは我慢が出来ず、Kormoran に彼女なりの理由を挙げてその場を去るのを悪意と取らないで欲しいと願う。彼女が彼の判断を待ちながら動かず、髪の毛を両手で塔のように上に纏め、頭を垂れ、項を見せて立っていたのは、まるで首をはねかねない乱暴者の回答のみを考えているかの如くでもあった。その姿を見て Herbert は乱暴者が以前は勿論いと述べ、否定的な回答への準備をしながら、時間がたったとぶつぶつ言い、それでは勇気を出して願った時よりも彼女は苦しむだろうと言い、義兄 Kormoran に今何が起きているのか判っているのかと訴える。Kormoran は判っていると答え、去る事を歓迎すると語ったので、Ilse は感謝し Kormoran に光を当てようとして、それは彼女がジャーナリストとしてニュース専門紙の特別ニュースを奪い、アメリカ、オハイオ製の心臓弁に対して例のポーランド Łódź 製の心臓弁と云う東側の勝利のニュースを掲載する様に彼が発言するきっかけとなった。

一方彼は立ち上がり、道路に向かって棺の所に更なる同乗者の席があるか呼び掛けようとするが、別の考慮がそうするのを止めたのである。しかし一体その車は何の為なのかと考え、今日は彼に様々な無駄な動きを省いてくれる素晴らしいコードレス電話が贈られた事を思い出したのである。彼は彼の原稿を机上から取り上げ、書かれていない裏面を叩き、彼女に差し出し、コードレス電話を取ってくるので、ニュースの内容の文面を作成する様に言う。Henkler は心配して Kormoran に走らない様に言うが、同時に彼の妻に何を文面にするのか問いかける。彼女は庭の道に向かって彼女の事を待つ様に呼び掛け、彼には未知の内容だと答え、彼が十分に休息を取ったら話すと言ふ。月曜の新聞から予定されていた記事を外させる事で頭が一杯に戻ってきた Kormoran は、

内容の事も彼の義弟の疲労度合いも問い合わせず、彼女のメモにも彼のメモ帳にも触れていない彼女に携帯電話を渡し、新聞社の有力者達に会い、彼等のニュースは時代遅れな事を示し、シュプレー河畔の新聞紙に如何に彼等がエルベ河畔の事に就いて悪く報告して来たか書く様に言い、そうする事で世界がオハイオだけでなく、小さな川 Lodka を知り、その岸辺の Łódź に命を延ばしてくれる工作人の一族が住んでいてそれが続いている事を知る様に急げと語る。

統一直後に東側の優位性も強調したかった旧東ドイツ住民の心境を現していると言える。続いて Henkler 夫妻と Kormoran の間でその事を巡って会話がが続くが、Ilse は電話或いはテレファックスで、そして日曜出勤でそれを個人的に伝えるほうが良いと思うと述べたので、Kormoran は緊急に司令官の様にそれなら棺台(霊柩車)に乗る様に告げたのである。家からテラスへ出て来た Anne は高揚した姿勢と不吉な語彙を口にした夫を見て、顔を顰めたが、先ず彼女の妹と一緒に乗るなら急ぐ様に言い、Schluziak の状態が良くない事を告げ、夫には次の騒ぎ迄に少し横になる様に忠告する。彼はその用意がある様に見えたが、まだ何が期待出来るのかと言い、連邦首相か我等の青少年スポーツ相か、Treuhand (信託公社)か産業組合のメディアかと言語り、ともかくも例えばまたもや Biermann ではなかろうと述べる<sup>73)</sup>。此処にも統一直後の旧東ドイツ国民の心境が伺える。彼女はまだ電話中の Felix Hassel が病棟に到着したらまたタクシーで戻って来ると述べたので、彼はぼんやりと屋内へ向かおうとする。彼女は Ruth 一行が出掛けたや否や戻ると言い、Ilse と階段を庭へ下り、彼は屋内へ入る。

### (XVIII)

その様にして Herbert Henkler のみがテラスに残り、上で引っ掛かって動かない巻き上げブラインドを直す為に顔を出した Kormoran との間に上下で対話が始まる。対話の内容は果たして彼等の一撃をハンブルガー IM 紙に Ilse が掲載出来るか、編集部がそれを受け入れるかを巡ってのものとなる。Ilse と編集者の仲を疑っている Herbert はその事に余り関心を示さず、ボスが編集

者を大砲に込めて遠くへ撃ち出す事を望みながら、嘗ては情報関係将校であった彼がボスである今日の編集長の名前を全く知らない事を不思議に思う。Kormoran は最初の問いに戻るが、Herbert は彼女が妨げられる事はないだろうと言い、彼女の評価を巡って前者は顧慮に欠けてはいないと言い、後者はただ思考に欠けていると述べ、前者は厳しい非難だと言い、思考が彼等を動物と区別すると言い、後者は動物達がそれを知っているのかと語る。更に話しに発展するが、Kormoran は Ilse の話しに戻ろうと言う。しばらく沈黙した後、Herbert は彼女が非常に人間的な人間であり、自分自身を中心にする人間で、時々むろんハンブルグの奴を彼女の中心に据える人間だと述べ、彼女は私欲がないが、その男は利己的で、非常に非人間的な人間だと語る。Kormoran は遠慮しながら、不謹慎ではあるが嫉妬なのかと問うが、Herbert はそれは彼から遠い話だと否定し、Kormoran の耳のせい、恐らくは心(心臓)のせいでもあったのだろうと言う。

相変わらずブラインド直しに従事している Kormoran は否定せず、此の言葉を契機に心臓の調子が変動する事を述べ、ねじれたブラインドから離れ、椅子を窓際に寄せ、不十分な眺めで満足し、義弟の更なる言葉を期待してか、或いは彼の無口を示す為かその椅子に座り動かない。Henkler もしばらく沈黙していたが、彼が Kormoran の沈黙に就いてコメントをし、結局は彼等は同じ色あせた事柄に仕えていたのだから彼の前ではよそよそしくする必要はないと言う。Kormoran が差し当たっては沈黙したが、激しく頭を振り、その点では確信を持ってないと述べたので、Herbert は彼は折に触れての家宅侵入で、Kormoran が折に触れての異議申し立てだと述べ、彼の「オーケー」と Kormoran の「しかし」は同じ鋏の二つの切り口で、愚かだったのは、ただ鋏が正しく切らなかった事だと語る。旧東ドイツ国民の情報機関員と評論家のその国での異なる役割を語って興味深い発言と言える。続けて彼は気分が高揚した目的に関しては改めて試みる必要があり、誰かがそれをすると思うと言う。旧東ドイツが求めた高い目的を実現したいと云う統一直後の旧東ドイツ国民の要望と言えよう。Kormoran は Herbert の口からそれを聞くのは珍しいし、彼とそれに

就いて語るのも珍しいと述べ、彼が先程最初の方を読んだ本(自伝的物語)は、すぐには気付かれないがその二元性を扱っており、どの様に始まるかは既に読んだが、終わりも判っていると語る。Herbert Henkler はそれを彼等(筆者注: 旧西側と思われる。)は好まないだろうと言い、Kormoran が最初は彼に気に入っているが、結末は彼等に気に入ると思うと述べ、二人の会話が進む。結局 Herbert がどうなるか先を語ってくれと言い、最初は楽しく洒落ているが、事態は似た様に進行するのかと聞くと、Kormoran は結末は死でより楽しくはならなかったと答える。朗読もするのかと問われ、彼はそれを認め、朗読には時間が掛かる事も認めたので、Henkler は結末に至る様に頼む。Kormoran は書いたものの結末を普通は口走る事はないが、言ってしまった結末は避けがたい事に係わって来るので、躊躇はしたが、封印を破る事を決断する。彼が死ぬ最後の章の内容とタイトルに係わる指摘は止め、彼が死に、噂が広まり、陰口が語られ、それは死に至る彼の耳には届かず、友人達の声も彼を殺したい程の敵対者達の声も、文法を軽蔑する者達の声も本を読まない国家の指導者達の声も、同僚達の声も同志達の声も聞こえないと云う結末を、語る。

続けて彼の死後何が起こるか知る必要はないのだと述べた上で、彼と同様、死に係わっている人々の彼の死に対する幾つかの姿勢を語り、債務者達の安堵の念に触れ、彼に批判された人々が堪えて来た復讐心の余り舌を血で染めようとも、彼の墓の上では口を嚙まざるを得ないだろうと話す。更に続けて彼は、一体誰が彼に対し被害の補償を求めないだろうかと語り、童話作家、ロシアの出版者、権力者、詩人達、国家最高の反ユダヤ主義国家評議会書記、会議中の大酒のみ、その他、公的私的に様々な形で彼と係わった人々に触れる。Kormoran と云う人物が、その背後にいる H. Kant が如何に様々な意味で批判を受け、それを自覚しながら、自負心を忘れていない事を語っていると云えよう。Kormoran は更に忘れてならないのは西側の照度に基づく人物達だと言い、ラインの黄金の様なくだらぬお喋りをする注釈者達、即ち長々とお喋りをするのを闘いと見なしているジュルト島の戦士達とか、更にその他の文化通の名をそのくだらぬ特徴を揶揄しつつ具体的に挙げ、それ以外の教授や文化関係

者にも同様な揶揄と共に触れ、批判する。これらの人物達は創作による人物が現実の人物に該当するのか私には判断出来ないが、此処にも俗物性に辟易している Kant の批判の矢は放たれている。Kormoran は続けて忘れてならない事として、溢流も助けとはならない事を証明するあの文学的出来事を挙げ、しかし何にもまして忘れてならないのは資本主義的システムの無限の荷重能力を誰よりも強制的に課する我々の支配者達であると言う。文学的出来事とは九十二年と云う時期を考えると作家同盟等の統一であろうか？ 何れにせよ統一直後に抱いた旧東ドイツのかなりの知識人達が抱いた感慨である事は間違いないし、Kormoran と同じ様に H. Kant の資本主義体制への痛烈な批判でもある。

Kormoran は此処で改めて例の流浪の左翼と名乗る楽団が現れ、もう一度連帯の歌を目指して、彼に伝統的農業労働者の歌から最新の歌詞を持って来る場面を考え、「我等の批評にとって慰めであれ。彼が今や天国へ行かねばならぬなら、彼はそこで Gauck と彼の牛に会う。」<sup>74)</sup> という歌詞を挙げる。彼は更に死後に彼に敵対して多くの新聞が何をするかを元気に生きている彼の仲間達が見ないとは言わないが、何ら役に立たない時、何の為に彼に味方をしようか？ 誰一人その力がない場合、どうして力を浪費しようか？ どうして攻撃の目標になろうか？ 自らの隙を見せる者は愚かだし、利口でいたい者は利口でいなければならないと悲観的結末に触れる。また彼等に伝えるのでなかったらその物語はどの様に終了したのだろうか？ と彼等は言い、壁崩壊直後の旧東ドイツ市民達のあの有名な商店街行進や大騒ぎや西側が東の市民に示した様々な姿勢を取り上げる様にとの彼等の要求に就いても触れる。それに就いて考えを述べ、その上幾つかの結論について語り、それらの最後の章を纏め上げねばならぬと言い、それは別としてそれが結末になるか Henkler に意見を求める。Kormoran はそう尋ねて彼の頭に快適な状態を再び窓枠の所に求め、死ぬ。それまで語ってきた自伝的物語の中での死ではなく、実際に死ぬのである。その様なわけで、「そう云う結末は病的に思える。」と言う Henkler の回答も「我々はより楽観的なものを好んだ。何処から君達にその様な悲観的の見方のみが来る

のか!」<sup>75)</sup> という訴えももはや届かず、回答がないので彼はそれとなく頭を上げ、告知する様な高い声で義兄の方に向かって、「一体誰が君達に書くことを促したのか?」と話しかけ、「しかし意見は許されているので、我々の挫折は何ら決まったわけではないと書け」と言い、「我々は世界体系の爆発の際に燃え尽きたのではなく、眉毛を焦がしたのだ。」と述べる。何と言っても夢は存在している。「それを書くか私に反論しろ、夢の専門家である君が存在する間は!」<sup>76)</sup> と彼は語り、彼の言葉に満足し、何かが起こった事を理解する迄、時間が過ぎ去った。そして Anne が彼の上方の部屋で Felix Hassel に向かって呼んだと云うより叫んだ時、彼は立ち上がりより良く見る為にテラスの端へ歩んだ。彼は長く待たねばならず、外科医の Felix Hassel が上の窓際に現れ彼にそれで十分に判る合図を送ったのである。

Anne は机上の電話を取り番号を並び、名前を告げ、死者の事に触れ、住所を言い、Felix Hassel の滞在も告げ、来やすい道を伝え、門とドアを終日開けておくと言い感謝をし、もはやそれには触れたくないかの如く受話器を机上に戻す。例の箱船の書類ももはや使用したくないかの如く、それを元の様にたたみ、椅子の上に乗せ、それが発見された元の場所、つまり鐘とその舌の間に入れる。半ば室内に戻りかけた彼女は今一度電話を取り、Ruth の例の葬儀社 Nihil-Nisi-Bene 商社に電話をし、録音されたメッセージを聞き、それが鳴り終わるや留守電に後者がもう一度来なければならない、今度は仕事の事だと告げる。

此処で Kormoran なる人物の六十六回目の誕生日半日を巡る Hermann Kant の二百七十頁に亘る長い作品は終わる。

#### 注

- 1) 酒井府:「Hermann Kant の“Abspann”を巡って」。『ドイツ学研究』。獨協大学。第43号。2000年3月。第44号。2000年9月。第45号。2001年3月。第46号。2001年9月。を参照せよ。
- 2) Hermann Kant: “Kormoran”. Aufbau Taschenbuch Verlag, Berlin. 1997. S. 2. Z. 16–27.
- 3) 注1)を参照せよ。

- 4) *ibid.* S. 7. Z. 13–17.
- 5) *ibid.* S. 13. Z. 11–12.
- 6) 注 2) を参照せよ。
- 7) *ibid.* S. 23. Z. 3–4.
- 8) *ibid.* S. 30. Z. 35.–S. 31. Z. 2.
- 9) *ibid.* S. 33. Z. 11–12.
- 10) *ibid.* S. 38. Z. 14–17.
- 11) *ibid.* S. 41. Z. 28–30.
- 12) *ibid.* S. 44. Z. 22.–S. 45. Z. 6.
- 13) *ibid.* S. 47. Z. 3–6.
- 14) *ibid.* S. 47. Z. 31–S. 48. Z. 2.
- 15) *ibid.* S. 49. Z. 7–9. Z. 12–14.
- 16) *ibid.* S. 49. Z. 21–23. Z. 27–29.
- 17) *ibid.* S. 54. Z. 23–24. Z. 31.
- 18) *ibid.* S. 62. Z. 28–30.
- 19) *ibid.* S. 63. Z. 7–10.
- 20) *ibid.* S. 67. Z. 3–6.
- 21) *ibid.* S. 67. Z. 10–13.
- 22) *ibid.* S. 93. Z. 13–14.
- 23) 注 2) を参照せよ。
- 24) *ibid.* S. 99. Z. 34–35.
- 25) *ibid.* S. 100. Z. 3–9.
- 26) *ibid.* S. 100. Z. 16–21.
- 27) *ibid.* S. 101. Z. 16–25.
- 28) *ibid.* S. 103. Z. 11–15.
- 29) *ibid.* S. 104. Z. 1–4.
- 30) *ibid.* S. 113. Z. 7–9.
- 31) 注 2) を参照せよ。
- 32) *ibid.* S. 118. Z. 8–9. Z. 11–12.
- 33) *ibid.* S. 120. Z. 22–25.
- 34) *ibid.* S. 129. Z. 3–7. Z. 9–10.
- 35) *ibid.* S. 129. Z. 29–30. Z. 33–S. 130. Z. 2.
- 36) *ibid.* S. 132. Z. 11–13.
- 37) *ibid.* S. 132. Z. 18–19.
- 38) 注 2) を参照せよ。
- 39) *ibid.* S. 132. Z. 28–32.
- 40) *ibid.* S. 142. Z. 27. Z. 30.

この場面の後に出てくる *die Agitka Heimatlose Linke Ahorngrund* (流浪の左翼) と名乗る楽団がその歌詞に歌う信託会社 (Die Treuhand) とは 1994 年末迄、旧東ドイツの資産を管理した公社。牧師 Joachim Gauck は 1940 年旧東ドイツ Rostock に生まれ、その父が 51 年逮捕されシベリア送りになり、55 年恩赦で戻った後、Rostock で神学を学び、牧師になった。65 年以来東ドイツ Mecklenburg 地方福音派教会に勤め、Rostock でも活動し、82 年–90 年、Mecklenburg 地方教会の指導者となる。89/90 年教会及び政治的立場からの公の抗議運動主唱者となり、毎週の礼拝とそれに続く Rostock 大デモンストレーションを指導した。また Rostock 新フォーラムの会 (党)員、スポークスマンとなった。90 年 3 月–10 月、彼は移行期の東ドイツ人民議

会新フォーラム議員になり、東の情報機関、「国家公安省 (MfS: スタージー) / 国民安全局 (AfNS) 解散管理特別委員会」の指導を引き受け、その後は人民議会でスタージー文書調査・公開に勤め、十月三日ドイツ統一日に連邦大統領 Weizsäcker 連邦首相 Kohl から同様の職務に任命された。その後も連邦議会スタージー文書法案議決と共に、スタージー文書に係わる連邦全権委員となり、著書「スタージー文書。DDR の不気味な遺産」を出版したりしている。従って彼に対する旧東ドイツ国民の感情は複雑で彼に対する評価も一様ではなかった。それが此の作品の登場人物の間に見られる。

- 41) *ibid.* S. 149. Z. 28.–S. 150. Z. 3.
- 42) *ibid.* S. 157. Z. 34–35.
- 43) *ibid.* S. 158. Z. 25–27.
- 44) 注 24) を参照せよ。
- 45) *ibid.* S. 161. Z. 26–27.
- 46) *ibid.* S. 162. Z. 5–7.
- 47) *ibid.* S. 164. Z. 28–29.
- 48) *ibid.* S. 172. Z. 33–34.
- 49) *ibid.* S. 173. Z. 7–8.
- 50) *ibid.* S. 176. Z. 10–16.
- 51) *ibid.* S. 176. Z. 20–22.
- 52) *ibid.* S. 180. Z. 30–31.
- 53) *ibid.* S. 185. Z. 27–31.
- 54) 牧師 Gauck 及びその官庁に関しては注 40) を参照せよ。
- 55) *ibid.* S. 188–189. オリジナルな三行の歌は以下の如くである。シュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン、海に囲まれ、今は牧師さんの、その牛の舌で商売をする。
- 56) *ibid.* S. 189–190. 上述の三行詩、牛 (Ossen) の舌が東ドイツ人 (Ossi) の舌に容易に変わり得たと言うのである。
- 57) ゲーテの有名な詩と旧約聖書のヨゼフとその兄弟の物語を出典とするトーマスマンの翻案等の引用。
- 58) *ibid.* S. 200. Z. 19–21.
- 59) *ibid.* S. 206. Z. 4–11.
- 60) *ibid.* S. 208. Z. 33–35.
- 61) *ibid.* S. 217. Z. 1–4.
- 62) *ibid.* S. 228. Z. 17–19. “Noch ist Polen nicht verloren.” (ポーランドは未だ敗れず。) は 1797 年 J. Wybicki 作『ドムプロフスキ』行進曲冒頭の句。
- 63) *ibid.* S. 231. Z. 23–24.
- 64) *ibid.* S. 235. Z. 32–33. S. 236. Z. 3. ルイセンコは旧ソ連の農業生物学者でスターリン主義の影響のもと 1920 代終わり頃より メンデルイズム批判の新しい生物学説、遺伝学説を唱え科学界のみならず、政治の世界も巻き込んだルイセンコ論争の主役となった。彼の学説に批判的なパビロフ (N. I. Vavilow) は 43 年獄死し、48 年には彼に反対する多くの生物学者は追放され世界の生物学者の抗議を受けた。その影響力は次第に薄れ、スターリンの死後失脚した。55 年以降はその学説の誤りも摘出され、現在は全く影響力を持たない。
- 65) *ibid.* S. 236. Z. 15–23.
- 66) *ibid.* S. 245. Z. 29–32.
- 67) *ibid.* S. 247. Z. 23–26. Z. 32–S. 248. Z. 3.
- 68) *ibid.* S. 249. Z. 13.

- 69) 注 1) の説明を参照せよ。
- 70) *ibid.* S. 250. Z. 23–24.
- 71) 東ドイツで反体制的歌を作詩作曲して公の場で歌い、1976年11月、市民権を剥奪された Wolf Biermann の事。当時多くの東ドイツ作家等が市民権剥奪に反対する運動を起こし、その結果何人もの作家が東ドイツから去った。当時作家同盟副会長であった H. Kant はその事件との関わりを指摘され批判されたが、彼が市民権剥奪に反対であった事は彼の半生記と云える自叙伝的な作品 “Abspann” にも(酒井府: 「Hermann Kant の “Abspann” を巡って」。獨協大学。『ドイツ学研究』。第43号。2000年3月。49–50頁)、Manfred Krug の „Abgehauen“ にも(酒井府: 「Manfred Krug の „Abgehauen“ をめぐって」。世界文学。No. 89. 1997. 97頁)見られる。
- 72) *ibid.* S. 252. Z. 3–4. Z. 6–7.
- 73) 注 71) を参照せよ。
- 74) *ibid.* S. 268. Z. 11–12. 更に Pastor Gauck に係わる注を参照せよ。
- 75) *ibid.* S. 269. Z. 19–22.
- 76) *ibid.* S. 269. Z. 28–S. 270. Z. 2.

## Über „Kormoran“ von Hermann Kant

Osamu Sakai

Hermann Kant, der bis zur Wiedervereinigung Deutschlands 1990 lange Zeit Vorsitzender des Schriftstellerverbandes in der ehemaligen DDR war, schrieb von Februar 1989 bis Mitte Mai 1991 eine Geschichte über sich selbst, eine über 500 seitige Erinnerung, die er vor der Wende nicht hatte schreiben können, mit dem Titel „Abspann“. Sie ist sehr interessant für das Verständnis Kants als einer der DDR-Schriftsteller, die seit der Wiedervereinigung wegen ihrer früheren Haltung auf heftigste umstritten sind, sowie als Person, die wegen ihrer Position als Vorsitzender des Schriftstellerverbandes (SV) von verschiedenen Seiten kritisiert wurde.

Man kann sagen, dass Kant mit diesem Text, dessen Titel die einen Film abschließende Namenliste bedeutet, 1991 den Vorhang einer Geschichte schließt, die mit dem Zusammenbruch der DDR ihr Ende fand, wie auch der Geschichte seines Lebens als eines Autors, in dem man stets einen überzeugten Befürworter des Systems sah und der als Teil der DDR- Geschichte betrachtet werden kann.

Nach diesem Erinnerungsbuch hat Hermann Kant 1994 einen Roman mit dem Titel „Kormoran“ veröffentlicht. Anlaß zur Niederschrift dieses Werks waren — wie bei „Abspann“ — Worte der Mutter in Hamburg, an die Kant sich auf der Seite vor dem Titelblatt erinnert: „Im Herbst 1989 faßte meine Mutter den Gang der Geschichte, die Lage der Literatur und das Treiben ihrer Söhne in den Satz: »Ihr hättet man lieber über Tiere schreiben sollen!« — Ich versuchte es, kam aber über eine Romanfigur mit Vogelnamen nicht hinaus. Eines Vogels immerhin, der laut Brehm unfriedfertig und tückisch ist und zu Neckereien neigt.“ Und Kant fügt hinzu, „Und einen Roman immerhin, der von allerlei Leben und allelei Sterben erzählt. — Als das Literarische Quartett meinen »Abspann«

verhandelte, hieß es über dessen Verfasser: »Ich habe Angst vor diesem Mann. Der ist heute noch gefährlich. Da muß man aufpassen!« — Auch zum Beweis, daß ich in Wahrheit lieb und schreckhaft bin, schrieb ich den »Kormoran« — Roman.“

Hier wird deutlich, wie stark die Kritik an ihm als Vorsitzenden des Schriftstellerverbandes in der früheren DDR und konsequenten Unterstützer des DDR-Systems war und auf ihn gewirkt hat. Ich habe mich dazu schon in meiner Analyse von „Abspann“ geäußert und bin in diesem Zusammenhang auch auf die Persönlichkeit Hermann Kants eingegangen.

Kormoran umfaßt 270 Seiten und beschreibt nur einen Tag, den frühen Mittag des 14. Juni 1992. Es ist der 66. Geburtstag des Kritikers Kormoran, wie auch der Tag, an dem Hermann Kant 66 Jahre alt geworden ist. Die Bühne dieses Romans ist eine heruntergekommene Herberge, die einmal Villa genannt wurde, in der es nun aber aussieht wie nach einem Erdbeben. Auf der Terasse spielen die wichtigsten Szenen. Kormoran ist hier „vor vier Sommern eingezogen, vor dreien(hat) Mühe mit sich selbst gehabt, vor zweien das Herz geflickt“, d.h., ihm wurden zwei künstliche Herzklappen eingesetzt und seither bewegen ihn Sorgen vor dem Tod und Hoffnungen auf ein Weiterleben. Mit den Worten „vor dreien Mühe mit sich selbst gehabt“ spielt er wohl auf die Situation vor und nach der Wende an — und damit natürlich auch auf die von Hermann Kant.

Obwohl Kormoran glaubt, dass das öffentliche Interesse an ihm zurückgeht, besuchen ihn an diesem Tag viele Freunde und Bekannte und gratulieren ihm zum Geburtstag. Zunächst bekommt er Post. Noch vor der Nachbarin Frau Birchel, die die Frankfurter Allgemeine lesend an der Gartengrenze sitzt, und sich in das Gespräch zwischen Änne und Paul-Martin Kormoran einschaltet, wann immer es ihr paßt (und auch wenn es unpassend ist), meldet sich der Briefträger Blauspanner zu Wort, der ein Bündel Briefschaften bringt und auch selbst gratuliert. Unter den Briefen sind einige Telegramme. Eines davon ist das vom Chirurgen Felix Hassel, der Kormoran vor zwei Jahren am Herzen operiert hat. Der schreibt ihm nun „Sie sollen, solange Ihre künstlichen Klappen halten, Ihre Klappen

nicht halten. Das, mein lieber Paul-Maetin, nenne ich, die Fliegen mit zwei Klappen schlagen.“ (Mit Wortwitz reflektiert und komentiert Hermann Kant hier die Lage der DDR-Intellektuellen nach der Wende).

Danach entwickelt sich ein anregendes Gespräch zwischen Paul, Änne, Frau Birchel und Herrn Blauspanner, in dem es um offene Vermögensfragen in der ehemaligen DDR, Rückführungsansprüche, Grundbucheinträge, Landnahme durch frühere Landbesitzer und andere akutuelle Fragen geht, die zu dieser Zeit als tabu betrachtet werden. Wenn Kormoran darüber hinaus die freiheitlich-demokratische Grundstücksordnung, das Zahnweh als Finanzerscheinung und die Anwalts-und-Pastorenmacht als Tabuthemen betrachtet, und sie als den kürzesten Weg zwischen zwei Standpunkten, Wende geheißen, bezeichnet, dann drückt sich darin Kants Standpunkt aus und wir verstehen, warum im Literarischen Quartett über Kannt gesagt wurde, »Ich habe Angst vor diesem Mann. Der ist heute noch gefährlich. Da muß man aufpassen!«.

Nachdem Kormoran mehrmals ins Haus zum Telefonapparat gelaufen ist, um Gratulationen entgegenzunehmen, kommt es zu einem Gespräch zwischen ihm und Änne, in dem es darum geht, ob er sich wieder mit der Welt versöhnen und wie lange er sie noch aushalten soll, ob zehn Jahre oder gar zwölf. Kormorans Antwort lautet: Sagen wir acht!. Er will noch acht Jahre weiterleben. In diesem Moment erscheint Herbert Henkler, der Mann von Ännes Schwester Ilse, frühere Oberstleutnant im Verteidigungsrat, der sich inzwischen mit Leib und Seele dem Schutz der Umwelt verschrieben hat. Während Kormoran wieder einmal in der Wohnung telefoniert, geraten Änne und Herbert auf der Terasse aneinander über einen Ehestreit zwischen ihm und Ilse. Danach kommen der ehemalige Vizeminister Horst Schluziak und seine Frau Grit zu Besuch, die sich jetzt mit Handelsverkehr beschäftigt. Nacheinander melden sich eine ganze Reihe von Freunden und Bekannten: Die Journalistin Ilse Henkler, die Kormoran ein schnurloses Telefon schenkt und später auf der Terasse ein verborgenes Schriftstück findet, das Kormoran einmal hinter Glocke und Klöppel versteckt und danach völlig vergessen hat. Es hat den Titel „DIE ARCHE KORMORAN“ und enthält die Lebenserinnerungen

Kormorans. Danach kommen Felix Hassel und Herr Aufderstell, der Versorgungschef von Hassels Klinik, der auch ein Mitglied des Frontkämpfermusikbunds „Die Agitka Heimatlose Linke Ahorngrund“ ist, mit einer kleinen Kapelle (Schalmei, Klampfe und Trommel). Diese präsentiert aktualisierte Strophen eines traditionsreichen Landarbeiterliedes, in denen mit bissigem Witz und scharfer Ironie nicht nur über die Treuhand, sondern auch über Pastor Gauck und die Stasi hergezogen wird. Gerrelind Baumanova, eine weltweit geschätzte Dokumentarfilmerin in bunten Kleidern und Ruth Regentraut, eine Bestatterin kommen noch später.

Der Roman „Kormoran“ besteht also zum größten Teil aus Gesprächen und Debatten unter Menschen, die sich anlässlich des 66. Gebrutstags von Paul-Martin Kormoran versammeln. In diesen äußern diese sich kritisch über die Lage nach der Wende, über wirtschaftliche und politische Angelegenheiten, die kapitalistische Gesellschaft, und auch über die Fehler der früheren DDR. Dabei kommen nicht nur ihre unterschiedlichen Haltungen deutlich zum Vorschein. Es zeigt sich auch, dass die Personen keineswegs friedfertig sind, sie reagieren oft tückisch und neigen zu Neckeleien. Gegen Ende des Romans liest Kormoran den anderen aus seiner Erinnerungsschrift, „DIE ARCHE KORMORAN“ vor, aber er kommt nicht weit, weil Horst Schluziak plötzlich einen Schwacheanfall erleidet, und viele Anwesenden die Terasse verlassen, um zu Hassels Klinik zu fahren. Nur Herbert Henkler bleibt zurück und beginnt ein Gespräch mit seinem Schwager Kormoran, der sich just über ihm an schräg verklemmten Rolladen zu schaffen macht. Zunächst reden sie über ihre jetzige Lage und die Rolle, die sie zu DDR-Zeiten spielten, dann über die Erinnerungen, aus denen Kormoran soeben vorgelesen hat. Auf Verlangen Henklers sagt Kormoran, dass er auch das Ende schon kenne und dass es dort um seinen(unvermeidlichen) Tod und die Reaktionen von Freunden, Feinden und Bekannten auf diesen Tod gehe. Kormoran sucht seinem müden Kopf wieder eine angenehme Lage auf dem Fensterblatt und ist dann tod. Also stirbt er an seinem 66. Geburtstag wirklich, „so dass ihn Henklers Bescheid, ihm scheinete dieser Ausgang morbide. Wir

liebten es optimistischer. Woher euch nur solche Schwarzsicht kommt!“  
„schon nicht mehr erreicht“.

Hermann Kant schrieb also einen Roman, der von allerlei Leben und allerlei Sterben erzählt, wie es im Einführungstext vor der Titelseite heißt. Aber, ob er mit diesem Roman tatsächlich gezeigt hat, dass er „in Wahrheit lieb und schreckhaft“ ist, wie es dort auch heißt, ist eine Frage, auf die sich so leicht keine Antwort findet.